

帝京科学大学教員



おすすめの本

どの本から
読んでみる？





CONTENTS

よりよく生きる.....2

- 佐藤 光浩 先生 (東京柔道整復学科)
市ヶ谷 武生 先生 (柔道整復学科)
山本 耕太 先生 (前学校教育学科・現名古屋大学)
渡邊 利明 先生 (医学教育センター)
三好 哲平 先生 (アニマルサイエンス学科)

絵本の中のともだち.....5

- 松山 寛 先生 (幼児保育学科)
高田 由基 先生 (学校教育学科)

こころの科学.....6

- 小黑 正幸 先生 (東京柔道整復学科)
渡邊 利明 先生 (医学教育センター)
浅沼 太郎 先生 (医療福祉学科)

思索への招待.....8

- 永沼 充 先生 (学校教育学科)
鈴木 幹夫 先生 (作業療法学科)

新たな視点を得る.....10

- 小出 哲也 先生 (総合教育センター)
相原 正博 先生 (理学療法学科)
並木 美砂子 先生 (アニマルサイエンス学科)

学ぶということ.....12

- 森長 真一 先生 (自然環境学科)
浅沼 太郎 先生 (医療福祉学科)

力を抜こう.....13

- 飯泉 祐美子 先生 (幼児保育学科)
稲川 健太郎 先生 (教職センター)

異文化社会に生きる.....14

- 櫻井 丈 先生 (学校教育学科)
昇 寛 先生 (柔道整復学科)

運動はすごい.....16

- 高田 由基 先生 (学校教育学科)
小山 優美子 先生 (東京理学療法学科)
吉田 真琴 先生 (柔道整復学科)

生命と死について.....18

- 潮見 泰藏 先生 (東京理学療法学科)
勝又 里織 先生 (看護学科)
佐藤 勉 先生 (東京柔道整復学科)

病との闘い.....20

- 内藤 隆宏 先生 (総合教育センター)
小出 哲也 先生 (総合教育センター)
山田 秀俊 先生 (生命科学科)

探求の楽しみ.....22

- 今野 晃嗣 先生 (アニマルサイエンス学科)
戸澤 あきつ 先生 (アニマルサイエンス学科)
尾野 明美 先生 (こども学科)
杉山 渉 先生 (東京柔道整復学科)

これからの教育.....25

- 米田 巖根 先生 (学校教育学科)
鈴木 貴史 先生 (学校教育学科/教職センター)



よりよく生きる

置かれた場所で
咲くためのヒントが
ここにある。



東京柔道整復学科
佐藤 光浩 先生



『面倒だから、しよう』

渡辺和子著 幻冬舎 【請求記号：198.24/W46】

著者の渡辺和子女史は 2・26事件によって命を失った渡辺錠太郎氏の次女であり、父が殺害された場面を目の前で目撃した過去をもつ。事件当時の著者の年齢は9歳であった。当初著者は、父親を殺害した加害者に対し、「恨んでいない」と自身の気持ちを語っていたが、実際に加害者家族に会った時、「自分は本当は心から許していないのかもしれない」と思ったという。修道女である著者は、この時の体験から、「汝の敵を愛せよ」という「神のみことば」の実践のむずかしさを痛感したという。しかし、「せめて相手の不幸を願わない」ということで、「自分なりの愛」を表現してみせたのである。これが著者なりの精一杯の「神のみことば」に対する実践であった。

壮絶な人生を送ってきた著者のモットーである、「面倒だから、しよう」を表題としたこの本には、自身のベストセラー『置かれた場所で咲きなさい』に対する実践方法が記されており、コロナ窩での生き方のヒントが詰まっている。

柔道整復学科
市ヶ谷 武生 先生



『人生の短さについて他二篇』

セネカ著 岩波書店 【請求記号：131.5/Se61】

言わずと知れた古代ローマの哲学者セネカの代表的作品。

「われわれは短い人生を授かったのではない。われわれが人生を短くしているのだ。我々は人生に不足などしていない。われわれが人生を浪費しているのだ。」

未来など心配しなくていい。過去の哲人に学び、英知を求め、全霊を傾けて過去と向き合い、その英知を学ぶこと。学びを「今ここ」で実践すること。そしてなにより時間を浪費してはならない。過去を忘れ、現在を無視し、未来を恐れる者は短い不安だらけの人生を歩むことになる。と指摘する。

「毎日を人生最後の日のように生きる人は、明日を待ち望むことも、明日を恐れることもない。」

これらの言葉に引きつけられたのならば、短い作品ですからぜひ読んでみてください。そして自分の考えと突き合わせてみてください。思う以上に人生は短いのですから。

時間を
浪費してはならない。



前学校教育学科・現名古屋大学
山本 耕太 先生



『最後の授業 ぼくの命があるうちに』

ランディ・パウシュ、ジェフリー・ザスロー著
ソフトバンククリエイティブ, ランダムハウス講談社
【請求記号：936/P28】

アメリカ合衆国にあるカーネギーメロン大学。その大学のある教授の「最後の授業」を収めた1冊です。

今日では世の中に随分と普及したバーチャルリアリティ。その研究の第一人者で、コンピュータサイエンスの世界的権威であったランディ・パウシュ教授。46歳で、愛する妻と3人の子供に囲まれ、最高に充実した生活を送る中、癌により突然の余命半年の宣告を受けた。

ランディ・パウシュ教授は、死を目の前にして、まだ幼い子供達や次世代を担う若者へ向けて、人生において大切にしてきたこと、目標を持つことの意味や楽しさについて、真剣に、かつジョークを交えながら面白く語ってくれています。

人生の最後の夏休みとも言われる大学生活において、「人生をどう生きるか」、「どのように夢を叶えるか」、さらには「人生をどう楽しむか」を考えるきっかけになってもらえたら嬉しいです。

人生をどう生きるか、
どう楽しむか。



理想を求めるほどに
傷ついていった若者たちへの
永遠のレクイエム。

医学教育センター
渡邊 利明 先生



『されど われらが日々 —』

柴田翔著 文藝春秋 【請求記号：913.6/Sh18】

『贈る言葉』

柴田翔著 新潮社 【請求記号：913.6/Sh18】



著者の柴田翔先生は東大独文科・大学院修了後、西独に留学中に作家活動に入り、昭和39年に芥川賞を受賞される(『されど われらが日々—』)。その後、東大教授、東大文学部長を歴任。「されど」と「われら…」のあいだにある「間」、「日々」の次の「—」等が、学生運動に席卷された若者の熱く激しい時代をものがたるには充分すぎるタイトル。しかしやっぱり、この時代は「若者が真剣に政治を語り、真剣に恋愛をしていた時代」だ。

「あの時、あの場所で、ぼくの想いはどこまで君に伝わっただろう。そして君の願いを、ぼくはどれだけ受け止められただろう。時を経てなお、ぼくは繰り返し問いかける。あんなにも濃密な時を共有しながら、今はもうそばにいない君に一。」(本文より)

『贈る言葉』は『されど われらが日々—』の続編。この本は確実に私の人生を変えました。

(前ページからつづき)

よりよく生きる

相手を「知る」
何事もすべては
そこから始まる。



アニマルサイエンス学科
三好 哲平 先生



『働く君に伝えたい「お金」の教養 人生を変える5つの特別講義』
出口治明著 ポプラ社【請求記号：159/D53】

卒業後、みなさんは社会に出て働き、生活するためにお金を稼がなければなりません。たくさん稼いでセレブになる、と夢を膨らませている人もいるかもしれませんが。一方で、お金について、「貯蓄できるだろうか」「年金はもらえるのだろうか」「投資は必要なのか」など漠然とした不安はありませんか？

このようなお金の不安は、実は“思い込み”からくるものであり、お金を知り、正しく使うことで幸せな生活を送ることができると本書には書かれています。「知る」「使い方」「貯め方」「殖やし方」「稼ぎ方」の5項目について若者のリアルな疑問の声を基に、講義形式で話が進んでいきます。将来、社会に出たときに楽しい生活を送りたかったら、大人に騙されなくなかったら、マスメディアに踊らされなくなかったら、ぜひ本書を手にとって読んでみてください。きっとお金に対する考え方が変わり、うまく使いたくなるでしょう。



絵本の中のともだち



幼児保育学科
松山 寛 先生

図書館には誰でも入れます。
それが、ライオンでも？



『としかんライオン』
ミシェル・ヌードセン作、ケビン・ホークス絵 岩崎書店
【請求記号：726.6/Kn7】

ライオンが図書館にいます。図書館の中は大騒ぎで、図書館員のマクビーさんはすぐに館長に相談にいきます。ですが、館長はこう言います。「で、そのライオンは図書館の決まりを守らないんですか？」「そのままにしておきなさい」と。ある日ライオンはマクビーさんに向かって大声で吠えかかります。でも、実はそれにはとても大事な理由があったのでした……。

この「ライオン」と「図書館」に別の言葉をあてはめてみるとどうでしょう。たとえば子ども、女性、外国人、性的マイノリティ、ホームレス。私たちは自分たちの社会の中で「なんだか怖い気がする」と自分とは立場・背景が違う人を排除していないでしょうか？その人たちはルールをやぶっているのでしょうか。もしもやぶっているなら、そこにはどのような理由があるのでしょうか？

自分は誰かにとってのマクビーさんになっていないかな、と想像してみてください。



学校教育学科
高田 由基 先生

『ともだちや』
内田麟太郎作、降矢なな絵 偕成社 【請求記号：726.6/U14】

「えー、ともだちやです。
ともだちは いりませんか。
さびしいひとは いませんか。
ともだち いちじかん ひやくえん。
ともだち にじかん にひやくえん」

そんなキツネの言葉からはじまるこの絵本。
「おい、キツネ」と呼び止めたのはオオカミ。「トランプのあいてをしろ」と言います。
ともだちやとしてのお代を求めるキツネにオオカミは……。

小学校教員の時には、この絵本の読み聞かせをしたり、道徳の教材として用いたりしました。子どもに「友達とは何か？」を考えさせつつも、「本当の友達って何なのだろう？」といつも自分が考えさせられます。「本当の友達とは？」その答えは人それぞれですが、友達となかなか会えないコロナ禍だからこそ、その人を思い浮かべて読んでみてほしい絵本です。

この『ともだちや』の他に『あしたもともだち』『ごめんねともだち』など「おれたち、ともだち！」シリーズの絵本は多数あります。きっと他の作品も読みたくなることでしょう。

本当の友達とは……。



こころの科学



東京柔道整復学科
小黒 正幸 先生

『EQ こころの知能指数』

ダニエル・ゴールマン著 講談社 【請求記号：141.6/G61】

この本が出版され、ベストセラーになってから20年以上が経過しているが、いまだに読み返しても気づかされること、日々の生活に生かせることが多い。むしろ、これから社会に出る学生の皆さんにこそ、必要不可欠な要素が書いてあると実感する。

EQ とは、もともと Salovey & Mayer により、EI ; Emotional Intelligence として提唱された概念で、「情動の知性」、「情動の知能」などと邦訳されている。ちなみに Goleman の原著も「EMOTIONAL INTELLIGENCE」が原題で、EQ という単語は出てこない。IQ (知能指数) と対比してわかりやすく論じるために記者が用いたと推察される。

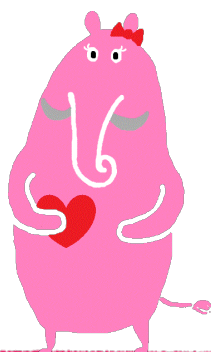
情動とは簡単に言えば、「心の動き」であり、「行動を生み出す感情」などと言えるだろうか。Goleman は、脳科学や心理学的な視点からさまざまな研究を引用して、情動をコントロールする必要性を説明し、情動にまかせて行動することは、原始時代では身を守る反応であったものが、現代社会においては、不適であり、良くない結果を招く可能性を指摘している。誰も、怒りにまかせて行動し、失敗したことがあるはずだが、情動がコントロールできていない典型であり、多くは悪い結果を招く。「自分の心をコントロールする能力」と、「他人に共感する能力」がうまく働いていないからで、それらをもつことが、EQ の重要な要素なのである。

情動のコントロールで
人生が変わる。



また、社会的な成功には IQ より、EQ が大事であるとも述べている。テストでどんなに良い成績をあげられる能力 (IQ) をもっていても、情動の自己認識能力 (EQ) が欠如しては、社会での成功は望めない。これを学校生活に当てはめると、「あの人、頭いいけど、友達いないね」とか、「あの人、成績は優秀なのに評価されないな」となる。思い当たることあるだろう。あるいは「あの人」が自分自身であるかもしれない。そうした人はこの本を読み、情動の自己コントロールについて、まず知ってほしい。

誰のころにも「情動」があり、そこから「行動」が生まれる。だから、良い行動も悪い行動も、「情動をコントロールできるか」にかかっている。「情動」が「衝動」として表出し、大失敗をする前に、ぜひ読んでほしい一冊である。ほとんど伸ばすことのできない IQ とちがいで、EQ は伸ばすことができるからである。



医学教育センター
渡邊 利明 先生



『最後の授業 心をみる人たちへ』

北山修著 みすず書房 【請求記号：146.1/Ki74】

著者の北山修先生は、京都府立医大在学中の1965年にザ・フォーク・クルセダーズを結成して、「あの素晴らしい愛をもう一度」「戦争を知らない子供たち」「帰って来たヨッパライ」等のヒット曲を作詞し、ミュージシャンとしてもよく知られた精神科医師・研究者（前精神分析学会会長、現白鷗大学学長）。先生は臨床研修後にフロイト精神分析研究のためロンドン大学へ留学された後、帰国され臨床研究に研鑽けんさんされていた時、私は慈恵医大大学院博士課程在学中。「心を消化する精神医学」の講演を聞き感銘を受けて以来のファンの一入です。

この本は、北山先生が奉職された九州大学大学院医学研究院教授の定年退官の折の学生・院生へ向けた最終講義をまとめたもの。フロイト分析からみた日本人の「心の台本」を、日本の古代からの神話を紐解きながら患者に寄り添う。このことをふまえて、現代のマスコミを深く体験した先生が特別な思いを込めて現代の患者に接する。「人生について考え、自ら意味を与えて生きていこう」という北山先生の心が、この講義からは伝わります。

<心>をみる、診る、看る・・・。



生い立ちで失った
人への信頼を、
人と取り戻すために。

医療福祉学科
浅沼 太郎 先生



『人を信じられない病 信頼障害としてのアディクション』

小林桜児著 日本評論社 【請求記号：493.74/Ko12】

「なぜそうしたのか、自分ではわからない」と彼は私に言いました。私がソーシャルワーカーとして、その人の直面した困難に耳を傾けていたときのことです。なかにはアルコールのような「物」やギャンブルといった「行動」に嗜癖しへき（addiction）する人がいます。

本書には、人を信じられない、頼ることができない人たちが多く登場します。精神科医である筆者は、患者の抱える「孤立と無力感」に目を向けました。そして生育歴の調査を通して「明白であれ、暗黙であれ、何か共通の生きづらさがあった、それがアディクションを生み出す原動力になっているのではないか（p.29）」と考えたのです。

本書を読みながら私が生い立ちを聞いた人たちの顔が浮かび、あの人があるアルコールを飲み続けた理由や、この人がギャンブルを止められない背景に思いを馳せました。そこにある「事情」は誰にでも起こりうる出来事で、遠く別世界に感じていたアディクションが、実は自分と地続きのところにあるのだと思います。



思索への招待

我々は本当に AI に
とって代わられるのか。



本の後ろには
必ず人間がいる。



学校教育学科
永沼 充 先生

『AI 原論 神の支配と人間の自由』
西垣通著 講談社 【請求記号：007.13/N81】

AI(人工知能)という言葉は今や社会のあらゆるところで使われる汎用語となっている。「AI お洗濯でかしくきれいに洗う」というようなキャッチコピーが現れる一方で、ネット上の 1000万枚の画像を読み込んだ Google のコンピュータが、教師なしで猫の概念画像を創造し話題となった。現実問題としても、完全自動運転の車が事故を起こした時の責任の所在が議論される時代である。こうなると、シンギュラリティー45(2045年にAIが人間の能力を超える)がSFでなくなってくる。

本書は題名のようにAIの本質を論じており、現状のAIには批判的な立場である。コンピュータ技術者から理学・哲学の源流に進んだ著者は、工学者の積極的AIではなく哲学者の否定的AIとも一線を画す。秋の夜長に一章ずつ時間をかけて丁寧に読み込んでいく本であろう。鉄腕アトムの中核系には自律型AIが入っているはずである。それが将来実現できるかどうか地道に議論する。これが本書の底流にあると考えても良いであろう。

『華氏451度』

レイ・ブラッドベリ著 早川書房 【請求記号：933.7/B71】

華氏451度は摂氏で表わせば 232.8℃で書物の紙が引火して燃え上がる温度である。本書の背景は高度に発達した未来の監視社会。そこでは効率が最優先され、自然との共生や書物を読んで思索することは禁じられている。図書館は反社会的施設となり、書物の個人所有が密告されると消火士ならぬ昇火士が現場に急行し、水ではなくケロシンを撒いて火をつける。主人公モンタークも昇火士で、物語は「火を燃やすのは愉しかった」から始まるが、どこかに違和感があり、任務に外れて焼くべき本をひそかに持ち帰って隠し持っている。

妻の密告により逃亡者となったモンタークは知識人レジスタンスに救われるが、そこで体を温めた焚火は本を燃やす火の対極にある。大事なことは活字で本に残された記録にあるのではなく、燃えてしまっても消えない記憶にある。彼らは一人一作品を記憶することにより「人海図書館」を創ろうとする。

作品中には実際の文芸索引からの引用も多く、巻末に出典がまとめられている。



作業療法学科
鈴木 幹夫 先生

『マグダラのマリアによる福音書 イエスと最高の女性使徒』
カレン・L・キング著 河出書房新社 【請求記号：193.9/Ki43】

『神は、脳がつくった 200万年の人類史と脳科学で解読する神と宗教の起源』
E.フラー・トリー著 ダイアモンド社 【請求記号：161/To69】

『ひとの目、驚異の進化 4つの凄い視覚能力があるわけ』
マーク・チャンギー著 インターシフト, 合同出版
【請求記号：491.374/C33】

昔、一か月ほど入院する羽目になった時、何を持っていこうかと思い、『世界の名著:聖書』を持って行った。救いを求めたわけではなく、西洋の文化や芸術を理解するためには、聖書の知識が不可欠とされているからだ。病棟の図書コーナーにはなぜか『少年チャンピオン』が並んでおり、聖書に疲れると「ハレンチ学園」を毎日一話ずつ見ながら、聖書も一か月で読破した記憶がある。新約聖書の福音書は四つであるのが常識だが、採用されず異端の烙印を押された外典がいくつかあり、翻訳され出版されている。その中の『マグダラのマリアの福音書』を読みたいと思ったが、既に絶版で、Amazonでも値段が五桁だったので諦めていたが、非カトリック系キリスト教大学の図書館にしかないはずのこの本が、本学の図書館にあったのだ。読んでみると、本質はジェンダー間闘争であった。その延長に魔女狩りがあるのは明らかだ。魔女狩り関係では『魔女の槌』が興味深い^{つち}が、翻訳がない。ちなみに本学の図書館には、ユダの福音書や、ナグ・ハマディ文書などもあり充実している。

これまた昔、ごく親しい友人が熱心なクリスチャンであったので、しばらく日曜に教会に通ったことがある。多くのキリスト教信者に間近に接する体験をしたが、唐突な比喩だが、臨死体験は「脳の辺縁系の賦活が脳全体に波及して幻覚を伴う一種の恍惚状態になる」との説明は真実であろうが、この体験を「眩^{まばゆ}い神々しい光とともに、神と出会った、それは素晴らしい体験だった」と表現することも間違いではないことを学んだ。さて、以前読んだ優れた論文を書いた著者が、『神は、脳がつくった』という本を書いていることを最近知って読んでみた。脳の進化的発達がいかに神を求めるに至るのかについて興味深かったが、ドーキンスの『神は妄想である』というのもあり、そちらは怖くてまだ読んでいない。

進化といえば、『ひとの目、驚異の進化』は、視覚-脳-進化を軸として目の機能を考えたものだが、定説から外れた着眼点が斬新で、大いに刺激となる本だった。最近ハヤカワ文庫化されたが、単行本のほうが図表が見やすいと思う。

定説と常識を忘れると、
新しい世界が見えてくる。



新たな視点を得る



総合教育センター
小出 哲也 先生

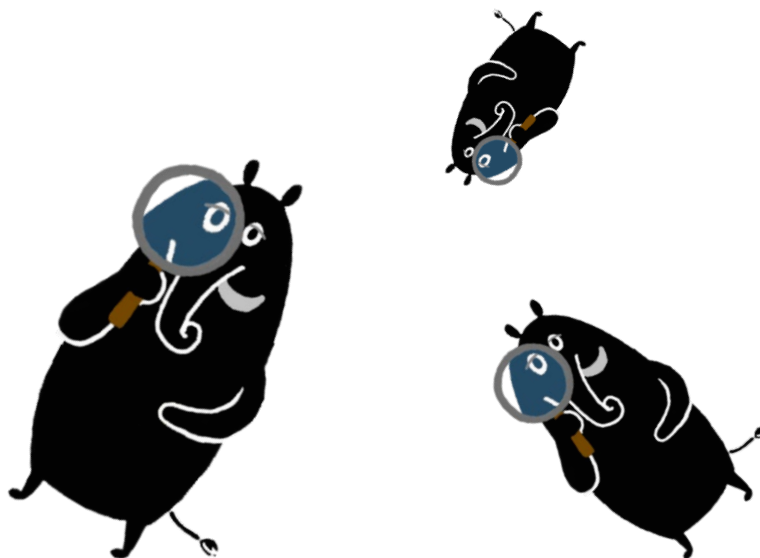
『善と悪のパラドックス ヒトの進化と〈自己家畜化〉の歴史』
リチャード・ランガム著 NTT 出版 【請求記号：469.2/W92】

君は家畜化されていないか？



何かこう尋ねるとまるでSF小説のようですね。今回紹介する本の原題は The Goodness Paradox。ヒトがもつ2つの相反する特性「美德や善行」と「凶暴性や残虐性」がいかんして進化したのかがテーマです。著者は、ハーバード大学で類人猿の研究を専門とするリチャード・ランガム。彼は、類人猿のボノボ、チンパンジー、そしてヒト社会を比較し、人類が進化したのは「家畜化」が原因であるという衝撃的なメッセージを我々に投げかけます。家畜化からどんなイメージが浮かびますか？ブタ、ウシ、ニワトリ・・・、その中にヒトも入るというわけです。姿・形も違う家畜に共通する特徴はあるのでしょうか？

家畜化は英語で domestication といいます。語源をたどると、飼いならされた、主人に支配された。では、一体誰にヒトが支配されて、飼いならされたのでしょうか？ぜひ、本書を手にとり、家畜化の意味を考えてください。まさに人類必読の書です。



理学療法学科
相原 正博 先生



『ノーザンライツ』

星野道夫著 新潮社 【請求記号：295.394/H92】

ノーザンライツとはオーロラ、すなわちアラスカの空に輝く北極光のことで、アラスカを愛し、現住民や暮らし、野生動物を記録した写真家のエッセイです。本書内にある「最後の白人エスキモー」では、自身の生活を改めて考えさせられる内容になっていました。一部紹介します。

新しい人生を求めアラスカを訪れ、エスキモーのやり方で、イグルーを建て、狩猟だけによる野原の生活を送っていた。その後も多くの若者が野原での生活に憧れ、訪れるがやがて消えていった。家族、親しい友人も。徐々に移り変わる社会に淋しさを感じる一方で、唯一の家族である息子はたくましく育ち、エスキモーとして生活を送る姿をみて「人はどこかで根を下ろさねばならない」ことを、憂いを秘めた笑顔でそっと教えてくれた。

現代においても、移り行く社会に焦りを感じる部分もあるが、今の生活や取り巻く状況を改めてみることの大切さを感じることが出来ます。

今の生活・社会に
取り残されることが
悪いことなのか？



色の見え方のメカニズムに迫り
「色覚異常」に潜む
社会的問題を扱う。



アニマルサイエンス学科
並木 美砂子 先生



『「色のふしぎ」と不思議な社会 2020年代の「色覚」原論』
川端裕人著 筑摩書房 【請求記号：496.45/Ka91】

著者は、自らの色覚についての疑問をかかえて暮らしてきたが、とうとうその理由にたどりつき、その体験談を中心に本書が編まれた。

サスペンスタッチな「自らの体験のひもとき」の旅に同行しながら、私は「色が認識される仕組みの理解」というサイエンスと、『色覚異常』のレッテル貼りによる不合理な差別をなくしていくためのソーシャルサイエンスが一つになる日を夢見る。サイエンスは常に人々の悩みや苦しみの源に、いくばくかの光をともしてくれるものである。

色覚を生み出すメカニズムを追求すると、「正常」「異常」の区別自体に問題があること、そして、違いを認識することの中に価値があることがわかる。違いを認め合う、というコミュニケーションの原点には、人々の暮らしの中にサイエンスが根付くことも重要だろう。

本学の学芸員課程での展示製作などの実習でも、色使いの注意点などぜひ参考にしてほしい。

学ぶということ

生物学は暗記科目

・・・ではない！



自然環境学科
森長 真一 先生



『生き物をめぐる4つの「なぜ」』

長谷川真理子著 集英社【請求記号：481.78/H36】

正直に白状します。僕は、生物学が暗記科目だから好きになりました。考えることなどなく、ただひたすら受験用語を暗記すれば良かったから。

そんな勘違いを根底から覆したのが『生き物をめぐる4つの「なぜ」』でした。本書では、動物の行動や生態をめぐる「なぜ」について、至近要因・究極要因・発達要因・系統進化要因の4つの視点から謎解きが行われていきます。僕の専門は植物生態学なので、植物をめぐる謎解きがないのは残念だなあ・・・と、初めて読んだ時に思いました。けれど、今振り返れば、植物が扱われていなかったからこそ、自分自身で考えることができたのだと思います。生物学が暗記科目から「考える学問」に変わった瞬間でした。

生物学が暗記科目とと思っている皆さん、『生き物をめぐる4つの「なぜ」』を読んでみませんか？ きっと、生物学が「考える学問」に変わるはずです。

医療福祉学科
浅沼 太郎 先生



『独学大全 絶対に「学ぶこと」をあきらめたくない人のための55の技法』

読書猿著 ダイヤモンド社 請求記号：379.7/D83】

本書は「一人では考えもしなかった見方に気づいて視界が開けるような喜び」を読者に伝えてくれます。

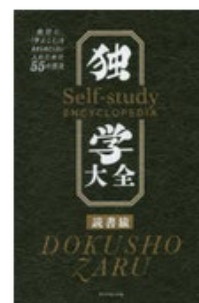
あなたが「自分に合う仕事は何だろう」と考えたとき、ひとまず関連するキーワードで検索したり、誰かに相談したりするかもしれません。そのほかに「答えを見つけないテーマ」に迫る方法があるとしたら、知りたいと思いませんか。

本書の読み方は人それぞれありますが、「学び方の事典」として使うことを私はお勧めします。学びや勉強と聞いて、どうか身構えないでください。まさにいま自分が悩んでいることに、ずっと前から考えている人がいたら、その内容を聞きたくなるはずです。

そもそも「社会に出たときの役割を自分でどうやって見つけるか」は、あなたがはじめて見つけた問いではありません。だからこそ「人類が重ねてきた知の営みにつながる(p.204)」ための技法を自分のものにして、先人の蓄積に学ぶことができるのです。

これからの人生を思いっきり楽しむために、分厚いこの本を開いてみましょう。

巨人の肩に乗って
思う存分楽しもう。



力を抜こう



幼児保育学科
飯泉 祐美子 先生

「心が疲れてきたかも？」
と思ったら。

『「つらいな」と思ったとき読む本』
中谷彰宏著 あさ出版 【請求記号：159/N43】



本書とは「つらい思い」をしている知り合いの為に何か力になりたいと思っていた頃に、偶然出会った1冊です。白い背表紙に赤い文字でタイトルが書かれ、「金色の帯」という書店の中で目に付く1冊でした。

著者の中谷さんは「①今日、つらいことがあった人。」「②悩んでしまった部下を励ましたい上司。」「③悩んでいる大切な人を勇気づけたい人。」この3人のために書きましたと言い、凹んでしまった時にそのネガティブな気持ちから抜け出すための処方箋ともいえるような58の具体的な例を挙げて読みやすい文章で述べています。

私は、本書は「つらい」に限定することなく、日常慌ただしく余裕のない生活している方にとっても、自身の行動を冷静に顧みて必要なエネルギーをチャージできる1冊であると思っています。

個々の具体例が2ページ程度で完結し、3分程度で読み終わります。読んでみたいと思うところだけ読み進めることも可能な、大変読みやすい「心の疲れをほぐす」1冊です。




教職センター
稲川 健太郎 先生

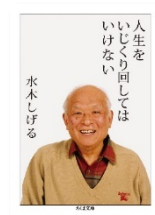
『水木サンの幸福論』
水木しげる著 角川書店、日本経済新聞社 【請求記号：726.1/Mi95】
『人生をいじくり回してはいけない』
水木しげる著 筑摩書房 【請求記号：914.6/Mi95】

君の前には高い壁がある。左にも、右にも。見上げるとはるか上の方にひとつだけ窓がある。どうすればここから出られるのか。君はじっと考える。そして、ふと後ろを振り向く。なんと、戸は最初から開いていたではないか。たしか、ヴァイトゲンシュタインは『哲学探究』でこのようなことを言っていたと思う。今の大学生活や今後の自分の生き方などについて考える時、君はこのような閉塞した感覚に陥ることはないか。たしかに「後ろを振り向く」ことが重要だとはわかる。ではどのようにすれば「ふと振り向く」ことが出来るのだろうか。その手掛かりのひとつとして水木しげる^{おお}先生の七か条を紹介しよう。

1. 成功や栄誉や勝ち負けを目的に、ことを行ってはいけない。2. しないではいけないことをし続けなさい。3. 他人との比較ではない、あくまで自分の楽しさを追求すべし。4. 好きの力を信じる。5. 才能と収入は別、努力は人を裏切ると心得よ。6. なまけ者になりなさい。7. 目に見えない世界を信じる。

この七か条のひとつひとつは、「分かったようで分からない」と謙遜されている『水木サンの幸福論』第一部で解説されているが、むしろ水木サンの人生経験を綴った第二部「私の履歴書」及び特別付録1と2がこの七か条を雄弁に語っている。もう少し水木サンの「ご意見」を傾聴したければ『人生をいじくり回してはいけない』も併せてどうぞ。

人生をゲゲゲで 
ビビビと幸福にしよう！



異文化社会に生きる



学校教育学科
櫻井 丈 先生

『異文化理解』

青木保著 岩波書店 【請求記号：361.5/A53】

今年、東京オリンピックが開催され、「多様性と調和」がその理念として掲げられました。実際にハイチ、アメリカにルーツを持つ大坂なおみ選手がオリンピックの聖火台に火を灯した行為は記憶に新しいかと思います。ここからごく象徴的なレベルではありますが、日本社会が多様な文化的、民族的背景を持った人々からなる多文化社会になりつつあることを示唆しているように思います。

それでは今回のオリンピックで謳われた「多様性と調和」はどのようにしてこの日本社会において可能となるのでしょうか。それは他ならぬ「異文化理解」であると言えます。今やグローバル化はより一層進展し、SNSをはじめとするインターネットによる相互の情報発信・受信、人やモノの移動が地球規模で行われ、今や誰もが自文化を超えて容易に異文化に入っていくことが可能となりつつあります。実際に日本においても様々な文化的背景をもった人々が海外から往来し、根を下ろしている昨今、文化人類学者の著者は、日常生活において異文化と関わりが皮膚感覚で捉えられてきているからこそ、異文化を適切に理解することで、自分達と異なる他者とのように向き合い、尊重し、共存していくのかを模索する視座を養うようにと読者に強く促します。



異文化の眼差しが
豊かであればこそ、
他者への尊重が可能となる。

そして「異文化理解」は同時に「自文化理解」、つまり異文化は自文化を映し出す鏡であることを教えてください。異文化理解という視座を通して見えてくるものは、異文化理解を通して自ら異なる背景を持つ人々とのつながりや交流を発見し、信頼関係を築き上げる行為であるということが言えるのではないのでしょうか。それは言うなれば、「異文化」を発見することは鏡に映る「自分」を再発見することに他ならないのです。例えば、このことは日本の文化の歴史的発展を辿れば、中国や韓国などの近隣アジア諸国や欧米諸国との関係を明確に正しく捉え、相互理解に至る基礎が出来上がることも可能であると示唆出来るでしょう。ここから異文化理解がこれからの日本の文化の発展とアイデンティティの形成に最も重要な視座であるとも言えるのではないのでしょうか。

世界には日本とは異なる様々な文化や価値観が存在します。自らとは異なる「他者」をより深く理解し、尊重することによって本当の「己」を知り、人間としての成長が出来ることを願っています。異文化理解に関心のある方や海外に出てみたい方は、本書を是非手に取って読んでいただき、より多くの異文化を体験してみてください。

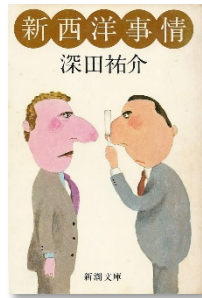
東西文化衝突の諸相

柔道整復学科
昇 寛 先生



『新西洋事情』

深田祐介著 新潮社 【請求記号：914.6/F71】



著者の深田祐介氏の第一印象は、少々厳しめでカッコイイ商社マン風。私が大学生の頃(44~45年前)、氏の講演会に参加してその話に耳を傾けた。講演会のテーマは「国際人としての日本人」であった。氏は当時航空会社に勤務し海外勤務を経験され、その経験から本書を著したようである。当時の日本はまだ海外生活への羨望が強く、講演会での氏の登壇は鮮烈であった。

我々学生は事前に氏の著したベストセラー『新西洋事情』を読破し、その人となりに興味を膨らませていた。本書の内容は、海外駐在員として欧州で生活をする日本人の夫婦のエピソードや東西文化の衝突をエッセイにまとめたもので軽やかな読み物であった。“日常生活の国際感覚”という視点から観れば、現在の社会でも決して色褪せない光景が思い浮かぶ。

学校教育学科
櫻井 丈 先生

『ユダヤ人とユダヤ教』

市川裕著 岩波書店 【請求記号：316.88/114】

本書は日本におけるユダヤ教研究の第一人者である著者がその研究の集大成を新書としてまとめたものです。まず序章である「ユダヤ人とは誰か」に続き、本書は「ユダヤ人」と「ユダヤ教」について「歴史」「信仰」「学問」「社会」の4つの章に分けて構成されており、著者はその膨大な知識を動員して、これら4つの視点からユダヤ人の生き方とその宗教文化であるユダヤ教について総合的に論じています。

著者はイスラエル、エルサレムにあるヘブライ大学の聖書・タルムード学科に留学し、ユダヤ教の啓示法規範の集成であるバビロニア・タルムードを学ぶ傍ら、市内にあるシナゴグに毎日通い、祈禱を捧げ、戒律を守る人々の生活をつぶさに自分の目で観察してきた経験を持っています。その中で著者が常に意識させられたこととして、約2000年の離散の歴史の中で様々な異民族への同化の危険に晒されながらも、「ユダヤ人」としてのアイデンティティが守られてきたのは一貫して「ユダヤ教」という一つの「生き方」が大きく影響しているというものでした。それはユダヤ「教」とは信仰対象としての唯一神、世界観を含めた教義体系、礼拝行為を定めた儀礼体系、明確な信徒集団などの要素を備えた所謂「宗教」ではなく、むしろ唯一神の啓示法に基づく人々の生き方を定めた「文化」であるということが著者の主張から読み取れるのです。特に全6巻63篇からなるバビロニア・タルムードは「持ち運びできる国家」としてユダヤ人独自の思考方法と生活習慣を生み出し、今日まで国、地域、時代を超えた「生き方」を築き上げてきたのです。

2000年の

離散の歴史の中で育まれた

ユダヤ人たちの生き方を通して

グローバル化における

日本人の生き方を問う。



こうしたユダヤ人が2000年間、様々な地域、社会において異民族に揉まれながらも独自の文化を守り、築き上げてきたという事実は、グローバル化が進む現代の日本社会に生きる我々に何を示唆しているのでしょうか。それは民族の独自性・アイデンティティなるものは多様性の中において発展するという事を伝えているのではないのでしょうか。実際に2000年の間離散の民であったユダヤ人が近代以降、科学、思想、芸術、医学、法曹、経済の分野において突出した人材を輩出してきたという歴史的事実は、ユダヤ人自身がその文化的独自性を追求した結果、人類が共有出来る普遍的な価値創造に至ったということ物語っています。『異文化理解』を紹介したときにも申し上げましたが、異文化は自己の文化を映し出す鏡でもあります。ユダヤ人の多様な生き方を通して、対照的な生き方をしていると思われがちな我々日本人も多様で独自の生き方を模索することが今後より一層求められてきているのではないのでしょうか。こちらも『異文化理解』とともにぜひ手にとって読んでいただき、人間文化の多様性と普遍性について思いを馳せていただければと思います。

運動はすごい



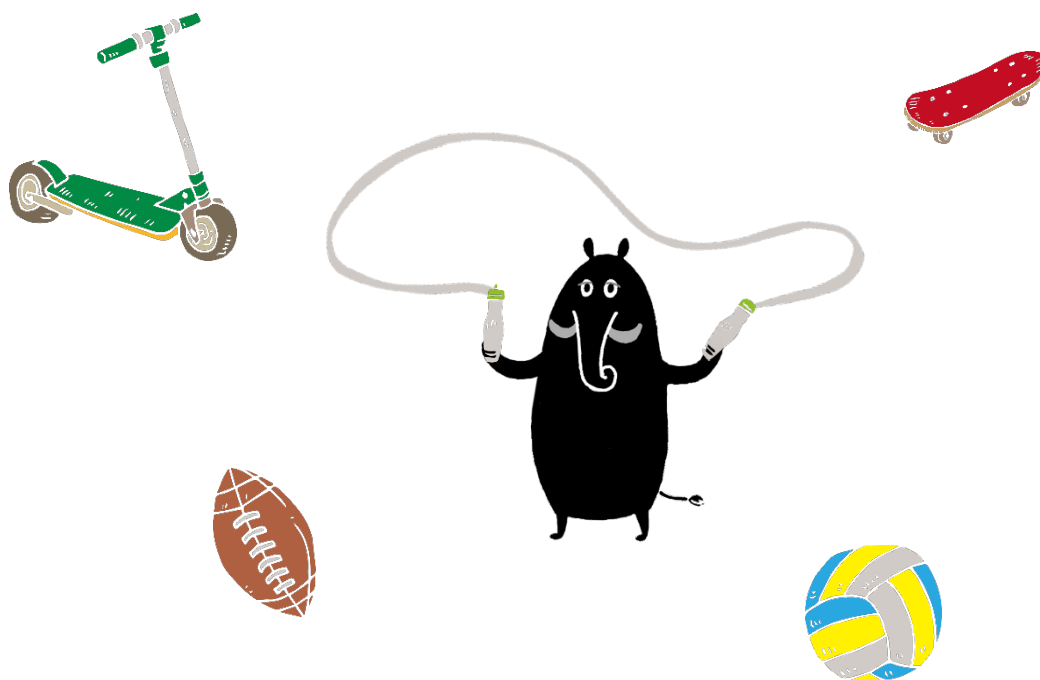
学校教育学科
高田 由基 先生

『スポーツと君たち 10代のためのスポーツ教養』
佐藤善人編著 大修館書店 【請求記号：780/Sa85】

小中学校の教員経験のある体育科教育学の専門家が中高生を対象に著作編集した本です。

「スポーツとはなにか」、「スポーツの可能性」、「スポーツの主体者としての君たち」という3部構成で、中高生にもわかりやすく書かれています。コロナによる相次ぐスポーツ大会の中止で目標を見失ったり、無観客開催でプレイヤーはモチベーションが上がらなったり、ファンは楽しみがなくなったり…。「スポーツって何なのだろう?」「部活って何なのだろう?」と考えることの多い昨今。特に「第7章 スポーツが生み出す喜びとのつながりと社会的価値」「第11章 部活の悩み」「第12章 スポーツの主体者としてのあなた」「第14章 運動部活動とあなた」を読んでほしいです。スポーツに関心のある人はもちろん、今後スポーツに携わっていく人、中学校高校の教員を志す人にはぜひ読んで、スポーツについての思いを共有できる仲間と話し合ってみてほしいです。

今まさに考えてほしい
スポーツの価値、可能性



運動は
身体だけでなく脳も鍛える！
読んだら運動がしたくなる本



なにかと我慢の多い時代の今、
自分の体の可能性と
向き合ってみませんか？



東京理学療法学科
小山 優美子 先生

『脳を鍛えるには運動しかない！ 最新科学でわかった脳細胞の増やし方』
ジョン J.レイティ, エリック・ヘイガーマン著 日本放送出版協会
【請求記号：498.39/R17】

うつ、ADHD、更年期障害、生活習慣病に脳卒中…人生の中で経験しうる様々な疾病、愁訴を予防できるもの、それが運動です。そして運動の何がよいか、それは皆さんが今すぐ始めることができ、薬や手術といった治療と異なり最も低コスト低リスクに行えるということです。そして、運動が様々な症状を予防している裏側では、筋や心肺の機能を改善させているだけでなく、脳の神経栄養因子を増やし、ニューロンの結びつきを強くしている、つまり運動は脳をも「鍛えている」のです。

この本では、様々な科学的知見に基づき、私たちが運動によって得られる利益が示されています。運動を治療手段とする理学療法士として、運動のもたらす効果には無限ともいえる可能性があることにワクワクしてしまいます。そして運動は良いことだ、と患者さんに教えるためには、安全で効果的な運動を指導できるようであれば、と自戒しています。



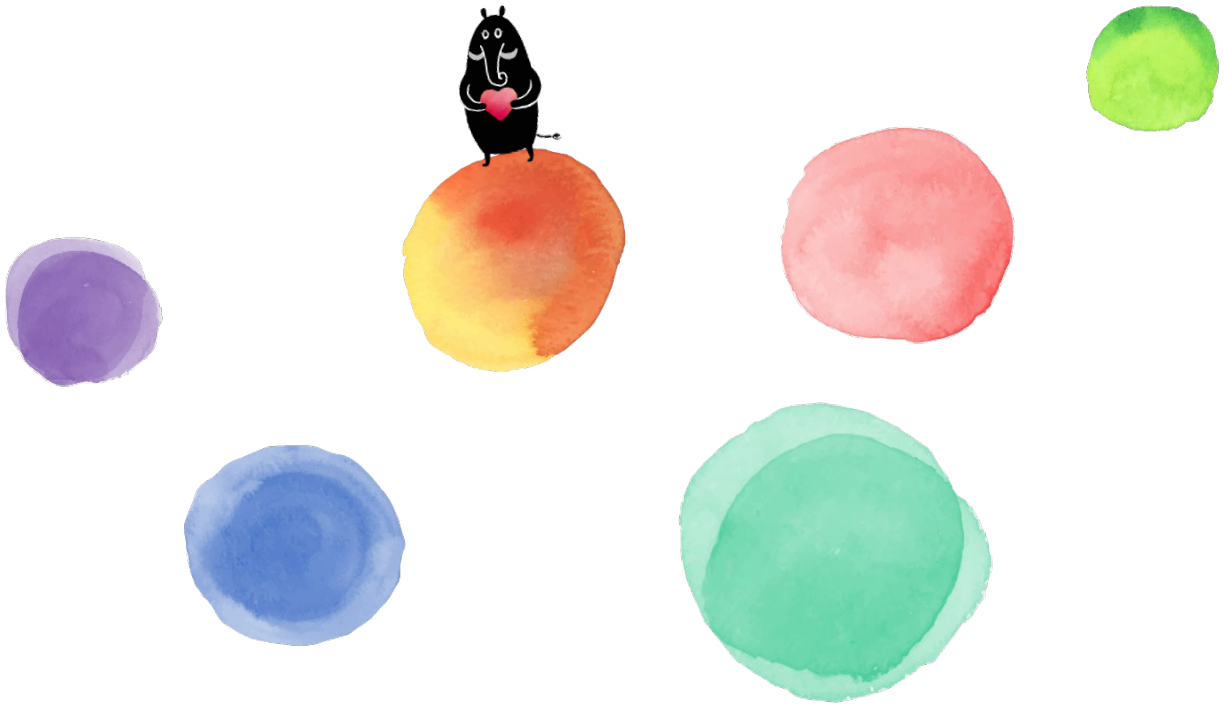
柔道整復学科
吉田 真琴 先生

『脳を鍛えるには運動しかない！ 最新科学でわかった脳細胞の増やし方』
ジョン J.レイティ, エリック・ヘイガーマン著 日本放送出版協会
【請求記号：498.39/R17】

この本は、運動をすることで広がる可能性を示した本です。昨今、様々な社会的な情勢により学生の皆さんには多くのストレスが加わっていると思います。この本には、運動を行うことで得られる身体的、精神的効果が、脳科学の視点や精神医学からの視点で述べられており、慣れない学習に悪戦苦闘する学生には「肩の力を抜く」という意味を込めても、是非一読していただきたい一冊です。例えば、有酸素運動を継続的に実施することで、記憶力の向上やストレスの緩和、血管などの循環器の機能改善が期待されています。勉強の壁にぶつかっている人は、一度ペンを置いて運動をするのもよいのではないのでしょうか？

医療系の学生だけでなく、運動が好きな学生、これから運動をはじめようか迷っている学生、運動が嫌いな学生に是非読んでもらいたい一冊です。きつと読み終わるころには走り出しているかもしれませんね。

生命と死について



東京理学療法学科
潮見 泰藏 先生

『死と身体 コミュニケーションの磁場』

内田樹著 医学書院 【請求記号：114.2/U14】

本書は講演記録をもとに書かれたものです。著者はあらかじめ原稿を用意せずに、いくつかの話題をもとに、聞き手の反応や自分のアドリブに任せて話を展開していくので、話が突如として飛躍するものの、それがまた新鮮な印象を与えたりもします。

「時間」が「死」に集約され、その死が身体とどのように結びつくのか、というのが本書のテーマとなっています。そして、「人間は、死んだ者とも語り合える。」という筆者の言葉を基軸に独自のコミュニケーション論を展開しています。「身体からのメッセージ」に始まり、「身体と記号」、「身体と時間」、「身体と倫理」というテーマで論が進められていき、最後に「死者とのメッセージ」で話を終えています。著者の一つひとつの思索がいつのまにか重層的に連なって読む者を圧倒します。所々に難解な箇所もありますが、大変読み応えのある良書です。

書名から受ける印象とは異なり、
意外なほど楽しめる良書



「当たり前」、
それは失って初めて
気づくものである。



看護学科
勝又 里織 先生



『産声のない天使たち』
深澤友紀著 朝日新聞出版 【請求記号：495.7/F73】

皆さんは、50人に1人が死産だということを知っていますか？

世界最高水準を誇る日本の周産期医療の中で、赤ちゃんの死は、それほど多くはないと感じるかもしれません。だからこそ、悲しみを共有する場がなく、気持ちを理解してもらうのが難しいこともあります。

『産声のない天使たち』は、流産や死産、新生児死によりお子さんを亡くされたお母さまやお父さまが、そのときの体験をもとに、わが子に対する想いを綴っています。同時に、私たち医療関係者に対するご意見やご要望、あるいは友人や家族に対する率直なお気持ちも書かれています。

出産の場において、元気に生まれることは、決して「当たり前」ではありません。私は、妊娠出産というおめでたい場面にある「悲しみ」や「想い」を将来医療関係の職種に就く予定の学生さんにはもちろんのこと、他学部の学生さんをはじめ、多くの方々に知っていただきたいと思い、この本をおすすめ致します。是非、ご一読いただければと思います。



東京柔道整復学科
佐藤 勉 先生

『ヒトはどうして死ぬのか 死の遺伝子の謎』
田沼靖一著 幻冬舎 【請求記号：463.6/Ta89】

アポトーシスという言葉をご存知であろうか？アポトーシスとは、例えていうと細胞の自殺のことを言う。自殺という言葉を聞くとネガティブな発想をしまいがちであるが、ヒトとして生きていく為に人間の細胞は、自ら死んでいくのだ。どのような事かという、例えば指の間の細胞も実は死ぬ運命である。このように死のプログラムが形成されていなければ指としての機能を果たせない。細胞の中にプログラムされている死の遺伝子という概念に、生命の奥深さを感じる。

生命を形成している細胞達が役割を果たし終えたところでアポトーシスし、そして生物が機能しやすいデザインへと形成されていく。この細胞死のメカニズムから生き方を考え、死があるからこそ自分の一生についても考えられるようになる。他にも不老不死の生物、クローン人間などと興味深い内容もある。ヒトは死んでしまう生き物であり、この限られた時間で生きる意味を考えさせられた一冊である。

死ということも
人の美しさである。



病との闘い



総合教育センター
内藤 隆宏 先生

『世界の心臓を救った町 フラミンガム研究の55年』
嶋康晃著 ライフサイエンス出版 【請求記号：493.2/Sh35】

本書は、フラミンガム研究について紹介したものである。この研究は、戦後の米国において、心臓病の予防対策を目的とした国家プロジェクトのひとつである。この疫学研究の舞台は実験室ではなく、ボストン郊外のフラミンガム市街において、地域住民のボランティアによって行われた。そして、フラミンガム研究は開始以降、数多くの成果が挙げられ、この街はまさに、本書のタイトルである“世界の心臓を救った街”となった。

また、フラミンガム研究は、心血管疾患との関連が疑われる要素を、初めて「危険因子」という言葉で定義した研究としても有名であり、その後の医学研究に対して多くの影響を与えた。この研究において用いられた研究デザインや分析手法は、現在でも医学研究のみならず、教育・社会学などにおいても広く使われている。

この本を開くと、フラミンガム研究がどのようにして始まり、またどのような苦労があったのか、どのような成果が得られたのかについて、関係者のインタビューをとおして丁寧に記してあることがわかる。したがって、予防医療を志す人だけではなく、ひろく疫学に興味がある人、医療学生などに、ぜひ一読を薦めたいと思う。

エビデンスは
どのように作られるのか。





総合教育センター
小出 哲也 先生

100年前のパンデミックから 学べなかったのは何故か？



『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ 人類とウイルスの第一次世界戦争』
速水融著 藤原書店 【請求記号：493.87/H47】

今からちょうど100年ほど前、第一次世界大戦のさなか「スペイン風邪」パンデミックが世界を恐怖に陥れました。この本は、日本におけるその貴重な記録です。ウイルスという概念すらない世界で、人々は何も知らぬままバタバタと死んでいきます。例えば、田舎から東京への修学旅行にきた高校生が感染し、地元の村にスペイン風邪を持ち帰り、そのまま村一つが全滅します。まさにディストピアな世界。

あれから100年、驚くべきことに私たちはこの教訓から何も学んでおらず、新型コロナウイルスでもたくさんの犠牲者を生み出していました。最初から2年を超える長期戦になることは分かっていたはずなのに…何故？ しっかりと考える必要があります。

人新世となり地球環境は破壊されています。これからは、これまで以上に多様なウイルスが我々を襲うでしょう。本書は、未知のウイルスの戦いの記録です。ここから学ぶことはたくさんあるはずです。



生命科学科
山田 秀俊 先生

『ワクチン・レース ウイルス感染症と戦った、科学者、政治家、そして犠牲者たち』
メレディス・ウッドマン著 羊土社 【請求記号：493.82/W12】

現在、私たちは新型コロナウイルス感染症の脅威にさらされ、大変な日々を送っています。それでも、新型コロナウイルスに対するワクチンが開発されたことで、人類はこの脅威を乗り越えようとしています。

人類の歴史は、インフルエンザ、ペスト、天然痘など感染症との戦いの歴史でもあります。人類はこれまで何度も、世界的な被害に苦しめられながらも感染症の脅威を乗り越えてきました。ウイルス性の感染症に対する大きな対抗策となっているのが、ワクチンです。

今回紹介する本は、麻疹ワクチン開発の光と影にスポットを当てたドキュメンタリー小説です。この話の中に、麻疹ウイルスワクチンを開発するために樹立された WI-38 という培養細胞が出てきます。この WI-38細胞ですが、実は私も生命科学の実験によく使っています。がんの研究を行う際に、正常なヒト細胞株としてがん細胞との比較によく使用される細胞です。WI-38細胞を何年も研究に使用していながら、WI-38細胞が今でも麻疹ウイルスワクチン開発に使用されていることも、WI-38細胞を使った麻疹ウイルス開発に大きなドラマがあったことも知りませんでした。一つの細胞株の樹立とワクチン開発にこんなにも大きなドラマが詰まっていることを知り、感動を覚えた一冊です。

ワクチン開発に興味のある人や、ドラマチックな生命科学の裏側に興味がある人にお勧めする一冊です。

ワクチン開発の光と影



探求の楽しみ

「バッタにむさぼり食われるのが夢」
という若手研究者の研究奮闘記



アニマルサイエンス学科
今野 晃嗣 先生

『バッタを倒しにアフリカへ』

前野ウルド浩太郎著 光文社 【請求記号：486.45/Ma27】

『右利きのヘビ仮説 追うヘビ、逃げるカタツムリの右と左の共進化』

細将貴著 東海大学出版会 【請求記号：468.4/H93】

『キリン解剖記』

郡司芽久著 ナツメ社 【請求記号：489.87/G94】



本書は、バッタにむさぼり食われるのが夢!という研究者が異国で悪戦苦闘する自叙伝的エッセイです。

アフリカのサハラ砂漠の周辺国などでは、バッタの大発生により農作物等が被害を受ける「蝗害」に悩まされており、現在も有効な対策が見つかっていません。そこで著者の前野さんは、博士研究員、いわゆるポスドクのときに単身モーリタニア・イスラム共和国に渡航し、サバクトビバッタの生態を研究することになります。相手を制するには相手を知ることから、というわけですが、肝心のバッタがなかなか見つからないなど、幾多の困難に見舞われます。

見どころは、若い研究者の苦労や葛藤について、自虐的な表現を交えながら、面白おかしく語られるところです。私が読書中に思わず声を上げて笑ってしまったのは、この本だけだと思います。

ぜひ、これを読んだ学生さんが、動物研究の世界に勇気をもって飛び込んでほしいなと思います。この本以外にも、新進気鋭の研究者が書いた本として、細将貴『右利きのヘビ仮説』や郡司芽久『キリン解剖記』もおすすです。



アニマルサイエンス学科
戸澤 あきつ 先生

『増補改訂 最新世界の犬種大図鑑 原産国に受け継がれた犬種の姿形 430種』
藤田リか子著；リネー・ヴィレス編集協力
誠文堂新光社 【請求記号：645.6/F67】

犬は多くの種類がいると思いませんか？グレート・ピレニーズやセント・バーナードのような大きな犬からヨークシャー・テリアやチワワのように小さな犬。大きさの違いは見ればわかると思いますが、犬が発揮できるそれぞれの得意な能力によってグループ分けされていることは知っていますか？世界畜犬連盟(FCI)では10グループに分けています。

本書ではこのグループ分けに沿って430種もの犬種が紹介されています。自分が知っている犬種、あるいは飼っている犬種がどのようなグループに入るのか、ぜひ本書で見てみてください。また、近年では動物福祉に配慮して断耳や断尾をしなくても認められるように、犬種のスタンダードが改正されています。そのような情報が更新された最新の図鑑です。写真が多く掲載されていますから、本書を開きながら様々な犬種やそれぞれの特徴を知ってもらいたいと思います。

写真を見ながら
最新の犬種情報を知ろう。



こども学科
尾野 明美 先生

西洋絵画から、
歴史や思想のみならず、
人間の欲深さや残虐さを知る。



『怖い絵』
中野京子著 角川書店 【請求記号：723/N39】

中野京子著の『怖い絵』は、高校生の時には世界史の授業に興味がなく、名前や地名を覚えるのが苦痛だった人や、西洋美術史は常識範囲で知っているものの美術館で西洋絵画を鑑賞することに興味がない人にお勧めしたい一冊です。

西洋絵画には、描かれた時代の政治や思想が背景にあったり、聖書やギリシャ・ローマ神話をモチーフにして描かれていたりします。また、一見、美しい絵画の裏には殺人や陰謀、悲劇や怨恨といった恐怖のドラマが潜んでいることがあります。

本書で紹介されている絵画は、聖書やギリシャ・ローマ神話の血なまぐさい物語、歴史の残酷な運命に翻弄される人々を題材として描かれた絵画で、その恐ろしさを解説しています。人は怖いものを見るときに、目を覆いながら手の隙間から覗き見たい心理が働きます。本書は、怖いと思いつつも、一気にページをめくり、いつの間にか読み終えてしまうほど、引き込まれてしまいます。

探求の楽しみ



東京柔道整復学科
杉山 渉 先生

『江戸の骨つぎ』

名倉弓雄著 毎日新聞社 【請求記号：288.3/N27】

『江戸の骨つぎ 昭和編 整形外科「名倉」の人びと』

名倉公雄著 中央公論事業出版 【請求記号：288.3/N27】

世界各国には数多くの武道(スポーツ)が存在するが、その名称が幾多の変遷を経て医療の国家資格へと昇華したケースは「**柔道整復師**」以外には見当たらない。

日本民族の伝統と精神は、太古の時代より「武」を中核精神として形成されてきた。この「武」を中心とする精神は、それ以降の歴史に伝統として引き継がれていった。

我が国の“**接骨の起源**”とされているのは、医療が初めて制度化された奈良時代(710~784年)になってからであり、医の分科14科が置かれ、その中に「**傷折科**」というものがおかれていた。

982年(平安時代)丹波康頼が、隋、唐の医書を集成して30巻の医学全書『**医心方**』を著した(現存する我が国最古の医書)。その18巻には骨折、脱臼、打撲、創傷などについて記載されている。

そして幾多の変遷を経て、**日本接骨の三大源流**と言われる3家が江戸時代に生まれている。

- 1. 江戸の名倉家
- 2. 長崎の吉原家
- 3. 大阪の年梅家

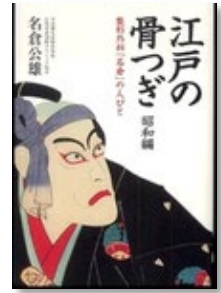
江戸の千住において「**名倉 直賢**」が1770年に「ほねつぎ」を開業し、「ほねつぎといえば名倉」、「名倉といえばほねつぎ」と言われるくらいに患者が引きも切らず訪れた。

その後名倉家は250年続いており、1848年に建てられた名倉家の建物は1984年(昭和59年)に**足立区登録記念物(史跡)**になっている。

名倉家の家訓が面白いので紹介する。**【^{とびしゅう}蕭衆、^{ほうかん}芸者、役者、相撲取り、^{ほうかん}幫間からは治療費をとらない**】というもので、彼らは人に楽しみを与えてくれる商売と、人のために我が身を粉にして働く下積みの商売なので無料にしたという。因みに「**幫間**」とは別名「太鼓持ち」、「**男芸者**」などと言い、宴席やお座敷などの酒席において主や客の機嫌をとり、自ら芸を見せ、さらに芸者・舞妓を助けて場を盛り上げる職業。歴史的には男性の職業である。

この著者である**名倉 弓雄氏**(1927~1995)、**公雄氏**(1930~)は業祖である直賢氏から数えて7代目にあたり、お二人の父親から整形外科医になって、現在は8代目が「**整形外科医院**」を開業している。

君は「骨つぎ」のルーツを知っているか?
~柔道整復師を目指す学生のために~



これだけ永く医療の家系が続いているのは、他に例をみない。

『江戸の骨つぎ』は1986年に出版され、また続編ともいえる『江戸の骨つぎ 昭和編』は2007年に出版された。

「千住 名倉」の治療法や家伝薬についても記されているので、一読の価値は十分あるし、時代背景が分かって非常に面白い。

弓雄氏が本の最後の「あとがき」に「**将来、「骨つぎ」を語る上に、この本が何らかの意義を持つとするならば、私の幸せこれにすぐるものはない**」と記している。

『江戸の骨つぎ』は既に絶版となっているが、まだまだ手に入る機会もあるので、是非今後柔道整復師を目指す諸兄には大変参考になることと思われる。

また『江戸の骨つぎ 昭和編』は名倉家のその後について記しており、これもまた興味深い。

名倉家の所有していた土地は膨大なものであり、現在の「東京電力」が大正15年(1926年)に建設し昭和38年(1963年)まで稼働していた「千住火力発電所」はその一角にあった。当発電所は巨大な4本の煙突を持っていたが、この煙突は付近住民などからは「**お化け煙突**」の名で呼ばれ、操業当時は映画などの作品にも時折登場するなど地域のシンボル(ランドマーク)として親しまれていた。現在「**お化け煙突**」の実物の煙突の輪切りと煙突のモニュメントが、我が「**帝京科学大学千住キャンパス本館**」の南西の角の植え込み付近に設置されている。

この地に「**東京柔道整復学科**」が開設・設置されたのも、何かの縁であろうか。

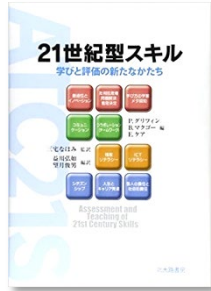
ここに柔道整復師を目指す学生に是非一読をお勧めしたい!

これからの教育



学校教育学科
米田 巖根 先生

21世紀に
求められる教育を
考えるための視点とは。



『21世紀型スキル 学びと評価の新たなカタチ』
P. グリフィン[ほか]編 北大路書房 【請求記号：371/G85】

目まぐるしく変わる時代の流れの中で、これからの教育には、何が求められるのでしょうか？

今回ご紹介する本は、21世紀に求められる教育についての視点を示してくれています。国際団体 ATC21S (Assessment and Teaching of 21st Century Skills)は、IT 企業、世界各国の研究者や政府、国際機関と協同で、21世紀型スキルについて検討しています。そこでは、ICTを活用しながら、互いに理解を深め、目的を達成し、さらに新しい課題を自ら設定してそれを解きながら前進していく、創発的で協調的なプロセスを通して知識を生み出すスキルとし、4つの分類からなる10のスキルに整理し、提案されています。

専門性は「ハードスキル」と呼ばれており体系だった知識や理論を指します。一方で、「ソフトスキル」は、効果的なコミュニケーション、傾聴力、創造力、分析力、柔軟性、問題解決力などが含まれます。

本書は、みなさんが、大学生生活で培う専門的な知識(ハードスキル)に、ソフトスキルを上手く活用し、絶えず変化する社会で役立つための指針となるでしょう。



学校教育学科/教職センター
鈴木 貴史 先生

『アクティブラーニング 学校教育の理想と現実』
小針誠著 講談社 【請求記号：372.106/Ko11】

本書のテーマである「アクティブラーニング」は新時代の教育方法として、数年前に学校教育界に広まった教育用語です。この「アクティブラーニング」に代表されるように、わが国では歴史的に魅惑的な(というより胡散臭い)カタカナ教育用語に翻弄され続けてきました。

学校現場において「アクティブラーニング」は、「座学はダメ」で「体験が大切!」のように単純化して誤解(本書では「幻想」と表現)され、次第に「活動あって学びなし」と揶揄されるようになりました。こうして、教育用語としての「アクティブラーニング」は今ではすっかり匂を過ぎたといえます。しかし本書では、これを発展的継承させた用語である「主体的・対話的で深い学び」についても同じ轍を踏む危険性があると指摘しています。

つまり、現在も漂い続ける「アクティブラーニング」の幻想が、学芸会型の教育方法だけを「学び続ける教員」を増産させ、その結果として、教育内容について「学び続ける教員」の意欲は下降の一途を辿っていると言えましょう。

学校教育に携わるすべての人が本書を手に取り、「主体的・対話的で浅い学び」に陥ることを未然に防いで欲しいと切に願います。

「アクティブラーニング」
という「浅い」学び。





2021年11月11日発行

帝京科学大学附属図書館 e-mail: library@ntu.ac.jp <http://www.ntu.ac.jp/library/>
千住図書館 東京都足立区千住桜木1-11-1 TEL 03-6910-3705 FAX 03-6910-3801
東京西図書館 山梨県上野原市ハツ沢2525 TEL 0554-63-6914 FAX 0554-63-4432